

花錦の後宮妃2

皇帝を守るため、お毒見係になりました

秦 朱音 Akane Hata



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

第一章 雪夜

青龍國の後宮で初めて迎える冬の、とある朝。

青龍國の後宮で暮らす私——曹明凜は、前世の記憶を持っている。

円窓の外から聞こえ始めた侍女たちの声で目を覚ました私は、重たい瞼を開けた。

牀榻の上、掛布の中は温かくて心地好いのに、頬や額に触れる空気は刺すように冷たい。早く火鉢に入れなければと考えながら寝返りをうつと、腰のあたりに回された太い腕が私の体を引き寄せた。

(永翔様、もう起きてる?)

私の隣にいる男性は、ここ青龍國の第十四代皇帝、青永翔様。

冬の寒さが苦手な永翔様は、火鉢で房室が十分温まるまで眠っていることが多い。まだ薄暗い中で彼の顔を覗き込んでみるが、両瞼は閉じたまま。息もゆっくり穏やかで、どうやらまだ夢の中にいるようだ。

(なんだ、寝惚けて私を抱き寄せただけなのね。さあ、今のうちに火鉢を準備しておこう)

永翔様を起こさないように腕をゆっくりとすり抜け、床に片足を着ける。凍える寒さの中を手探りで上衣を掴み、肩から羽織った。

殿舎の外にはもう侍女たちが控えている。扉を少し開けて侍女の子琴に中に入るよう声をかけると、小雪混じりの冷たい空気が吹き込んだ。

「雪……? どうりで今朝は特に寒いわけね」

「明凜様、早く中にお入りください。皇帝陛下の寵愛を一身に受ける妃に風邪を引かせてしまつては、私が罰せられてしまします」

子琴は慌てた様子で、私を房室の中に押し戻した。
「寵愛を一身に、なんて大げさよ。まだ陛下は眠つていらっしゃるから、少し声を落としてくれるかしら」

「……はい! 失礼しました!」

「子琴、だから静かにしてつてば……」

慌てて子琴の口に指を当てて黙らせたが、少々手遅れだつたようだ。牀榻の掛布の中からくしゃんと一回、永翔様の大きなくしゃみが聞こえてきた。

青龍國皇帝の後宮で暮らす私——曹明凜は、前世の記憶を持つている。

私の前世は、現代の日本に生きる、ごく普通の会社員。仕事を終えて家に帰る途中、

駅の階段で足を滑らせて転げ落ちたところまでは記憶がある。恐らく前世の私は、その時に頭を打って絶命したのだろう。

そんな私が、階段から落ちる直前まで読んでいた中華風ファンタジー小説『青龍の女帝 玲玉記』の世界に転生したことに気が付いたのは、今から一年ほど前のことだ。

彼女は姉の身代わりとして青龍国の前の皇帝の妃となり、その後に女帝を目指す。祖国である玄龍国の王族にしか操ることができないといわれる呪術を使い、自身の野望の邪魔となる者を次々に蹴落として、成り上がっていく。

それが、玲玉記の物語だ。
(ストーリー)

残念ながら前世の私は、玲玉記を読み終わる前に命を落とした。玲玉が青龍国の女帝となつたのか、はたまた夢やぶれて青龍国を去つたのか――今の私には、この物語の結末を知る術はもつない。

(でも、もはや玲玉記の結末なんて知らなくても構わないわ。今、この世界で私が守るべき未来は、別にあるんだから!)

実は私には、この小説を大いに愛する理由があった。

玲玉記の世界に転生したことを悟つた私が真っ先に思い浮かべたのは、夏玲玉にとつての敵役である青龍国皇帝・青永翔、そしてその后である鄭玉蘭のことだった。

永翔と玉蘭は、青龍国の実権を握ろうとした皇太后・夏玲玉によつて殺されてしまう。生まれ変わつても一緒になるう、と誓ひ合つて息絶える二人を描いた場面は涙が出るほどに美しく、私はこの二人のことが大のお気に入りだつた。前世の言葉で表現するならば、いわゆる推しである。

せつかく玲玉記の世界に生まれ変わつたのだから、二人の恋を応援したい。

玲玉によつて引き裂かれることがなく、添い遂げて幸せになつてほしい。

そう考えた私は、彼らを夏玲玉の魔の手から守るために、玲玉記の舞台となる青龍国後宮に入る決心をした。

(私の花鉗の力を使えば、青永翔と鄭玉蘭を守れると思ったのよね。まあ、そう簡単にはいかなかつたけれど……)

今世の私には、不思議な力が備わつていた。額に花鉗の形のアザがあり、そのアザの力で毒を浄化することができます。人を死に至らしめるような強毒から軽い風邪まで、花鉗のおかげでなんだつて癒すことができたのだ。

これなら、皇帝陛下である青永翔のお毒見係を務めることができる。皇太后の地位に上り詰めて青龍国を牛耳る夏玲玉が、いくら彼の命を狙つて食事に毒を盛ろうとも、

私が側にいてその毒を浄化すればいい。

そのために私は、幼い頃から武道や学問を教わっていた曹侯遠先生の養女となり、後宮入りを果たした。

(後宮入りする前から知っていた侯遠先生の知人——翔永様の正体が、青龍国皇帝・青永翔だったことは驚いたけど)

玲玉記において、青永翔と鄭玉蘭は灯華祭という皇都の祭りで初めて出会うことになる。無数の天燈が舞う夜空の下で、青永翔が鄭玉蘭を見初めるという展開だ。

二人が恋に落ちる瞬間を実際に見たかった私は、いそいそと灯華祭に出かけた。しかしその日は玉蘭を見つけることはできなかつた。

代わりに「翔永」と名乗る男性と出会つたのだが、なんとその翔永様の正体が、青龍国皇帝・青永翔だったのだ！

入内して、翔永様……もとい、永翔様の側に来られたことは良かつたものの、後宮妃が厨房に足を踏み入れて毒見をすることは許されなかつた。

お毒見係として後宮に入るのに、厨房に入ることを禁じられては元も子もない。だから私は永翔様やその側近である商儀様と示し合わせ、皇帝の寵妃を装うことにした。永翔様が毎晩私の暮らす馨佳殿に通い、私はお毒見係として彼と食事を共にすることになつたのだ。

私が花鉗の力を使つて毒見をしていることを皇太后に悟られないよう、永翔様はそのまま朝まで馨佳殿で過ごし、あたかも私が寵愛を受けているように見せかけた。

(初めは仮初の寵妃となる約束だつたのに、結局私はお毒見係という役目の枠を超えて、本気で永翔様に恋をしてしまつたんだけど……)

私が入内したあとも、皇太后の謀略は続いた。

皇太后は、永翔様の実の母である楊淑妃に冤罪をかけ、皇統から除名しようと謀つていたのだ。

皇太后は永翔様の摂政として、青龍国の実権を握つてゐる。しかし、永翔様が冠礼の儀を終えて正式に成人として扱われるようになれば、摂政としての彼女の役割は終わる。その前になんとかして、永翔様の力を削ごうとしたのだろう。

私と永翔様は力を合わせ、青龍国重鎮の官吏である蔡雨月やその娘の蔡妃の協力を得た上で、楊淑妃の除名を阻止することができた。皇太后の謀略を、上手く退けたのだ。

そしてその過程で、私は今世で失つていた幼い頃の記憶を思い出すこととなつた。私の今世での本当の名は、明凜ではなく琥珀。

養父だと思っていた曹侯遠先生は、私の実の父親だつた。

その上、まだ私が曹琥珀として生きていた幼い頃、皇宫を離れて曹家で療養してい

た永翔様とは、幼馴染という間柄だった。私が明凜として入内するよりももつと前に、私たちは既に出会っていたのだ。

(あの頃、永翔様は六歳、私は四歳。前世では推しだった永翔様が、まさか今世では私の幼馴染だつたなんてね……今でも信じられないわ)

あのままずっと変わらず幼馴染として過ごせていたら、どんなに良かつただろうかと思う。しかし実際の私たちは、とある悲しい出来事によつて一度引き裂かれることになった。

ある夜のこと。私と永翔様は大人の目を盗み、皇都で行われていた祭りに出かけた。護衛も付けず、幼い子ども一人だけで夜の皇都に繰り出すなんて、今考えれば随分と無謀なことをしたものだ。案の定、永翔様はそこで刺客に命を狙われることとなつた。

永翔様に向けて放たれた毒矢に気付いた私は、咄嗟に身を投げ出して彼を庇つた。そのまま背中に毒矢を受け、幼い永翔様の目の前で、私は一度命を落としたのだ。私がその場でこと切れた後、永翔様は護衛によつてすぐに皇宮に連れ戻されたといふ。

(幸か不幸か、私はその後、幽鬼に命を救われたのよね)
幽鬼は人の記憶を食べるといわれている。私は幽鬼に曹琥珀としての記憶を差し出

し、その代わりに、毒を浄化するための花鉢を授けられた。

その花鉢の力によって、毒矢から私の体に回つた毒は浄化された。

しかし息を吹き返した私は、幽鬼に記憶を差し出したこと、曹琥珀としてのすべてを忘れてしまつていた。もちろん、大好きだつた幼馴染の永翔様のこと。

琥珀から明凜に名を変え、父の友人である黄夜白に引き取られた私は、その時から黄明凜として生きることとなつた。

(後宮に入つて私の記憶を奪つた幽鬼と再会し、そして彼女を救つたからこそ、こうしてまた永翔様のことを思い出して一緒にいられるのだけど……)

前世では推しとして崇め、今世ではその相手に恋をした——私はどれだけ永翔様のことが好きなんだろう。今の私の心の中では、目の前にいる幼馴染の永翔様を愛おしく思う気持ちと、推しとして遠くから応援したい気持ちが、複雑に入り混じつている。

私が後宮入りしてから、もうすぐ季節が一回りしようとしている。けれど、長い時間をここで過ごしても、自分の今の境遇が現実のものなのかどうか、時々分からなくなる。

玲玉記には、琥珀や明凜という名の登場人物はいなかつた。永翔様に幼馴染がいたという出来事も、書かれてはいなかつたはずだ。

ここは間違いなく玲玉記の世界ではあるが、私の知つてゐる玲玉記とは、少し展開

が変わつてきている。本来はとっくに入内しているはずの鄭玉蘭が、まだ後宮に現れていないのでその証だ。

(玲玉記に書かれた展開が変化したのは、悪いことじゃない。皇太后に殺されるはずだった永翔様と玉蘭の命を救えるかもしれないんだし)

推しの二人には、絶対に幸せになつてほしい。

二人を幸せにするために、私はこの後宮で生きていくと決めたのだ。

牀榻から体をのつそりと起こした永翔様に気付き、私はお茶の準備を始める。

「……明凜、おはよう。今朝は随分と冷えるな」

「おはようございます、永翔様。雪も降つてますよ。でも、そろそろ諦めて起きてくださいね。冠礼の儀の準備でお忙しいんでしよう?」

「ああ、今日も仕事が山積みだ」

牀榻から下りて火鉢の前の榻に座ると、永翔様は上衣の襟を深く合わせて寒そうに背中を丸めた。

幼い頃から皇太后に命を狙われ、たびたび食事に毒を盛ってきた永翔様。目の前で自分の毒見役が亡くなるのを何度も目の当たりにするうちに、永翔様は毒見を拒むようになつた。

いつしか食事をすること自体が怖くなつたのだろう。永翔様は大人になつた今でも食が細い。そのせいか体も弱くて、頻繁に風邪をひく。

(私が入内した頃に比べれば、随分お元気にはなられたけど……)

花鉢の力を持つ私は、永翔様のお毒見係として適任だった。万が一私が毒を摂取してしまつたとしても、その毒を浄化する時に花鉢がほんのり熱くなつて気付くことができるからだ。しかし残念ながら私の額の花鉢は、今ではすっかり消えてしまつている。

毒を浄化する力も、失つたままだ。

「永翔様、お茶を淹れました」

「ありがとう。毒見は不要だ」

私がお茶に口を付けようとしただけで、この反応だ。

(茶器も茶葉も子琴が厳重に管理してくれているから、毒を仕込まれる心配はないと言つているのに)

穏やかかそうに見えて、永翔様は意外と頑固なところがある。ここで「毒見をさせてほしい」と食い下がつたところで、頑なに断られるに決まつて。私は永翔様に言われた通り、毒見を止めてお茶を差し出した。

温かいお茶を口にして一息ついた永翔様の隣に、私も並んで座る。

腕と腕が触れ合うほどの至近距離にいる推しの顔は、寝起きにもかかわらず今朝も素敵だ。

「それにしても、永翔様。楊淑妃の皇統除名を阻止した一件のあと、皇太后陛下には何も動きがありませんね」

「ああ。私の冠礼の儀の準備もつつがなく進んでいる。皇太后なら必ず横槍を入れてくると思っていたのだが……朝議にも出て来ず、玄龍国出身の官吏を名代としているよ」

「最近は宮に籠りきりで、ほとんど外出もなさらないとか。今がチャンスですよ、永翔様！」

「ちゃん、すう……？」

「あつ！　ええっと……絶好の機会、と言いたかったのです」

（危ない危ない！）

少し気を取り抜くと、つい前世での言葉が口をついて出でてきてしまう。

その場を取り繕おうと、私はすぐ側にいた黒猫の珠珠を抱き上げて背中を撫でた。

「明凛。絶好の機会とはどういうことだ？」

「皇太后陛下がこれまでどのようにして永翔様に毒を盛っていたのか、今のうちに調べるんです。玄龍国王家に伝わるという呪術を使ったのであれば、その呪術の正体

を探りましよう」

「呪術か……先日の清翠殿での一件を考えても、皇太后が呪術を使って私に毒を盛つていたことは間違いないだろうな」

強張った表情で目を伏せる永翔様の言葉に、私も黙つて頷いた。

清翠殿の一件というのは、数か月前に後宮で起こった幽鬼出没事件のことだ。

前の皇帝の妃嬪で、何年も前に亡くなつた陶美人が幽鬼となり、夜な夜な清翠殿に現れるようになつたのだ。そして、その清翠殿に近付いた宮女の一人が不審な死を遂げた。

（誰もが、宮女は幽鬼に殺されたと思い込んだのよね。でも、実際は違つた）

実はその時、清翠殿には人知れず強力な呪術がかけられていたのだ。青白い光が殿舎の周りを囲つており、その光に触れた者をたちまち毒で侵す、という呪いだ。

公には伏せられていたが、亡くなつた宮女の死因も、毒だつた。

四龍と呼ばれるこの大陸の四国の中では、呪術を使えるのは玄龍国の王族のみだと言われている。つまり清翠殿に呪術を張り巡らせたのは、この青龍国後宮に出入りできる玄龍国出身者——皇太后・夏玲玉であるとしか考えられない。

しかし、清翠殿に呪術がかけられていたことの目に見える証拠がない以上、皇太后を宮女毒殺の罪に問うことはできなかつた。

(花鉗の力があつたからこそ、呪術による毒を浄化して、あの一件を解決すること
ができたのだけど……)

珠珠の背中を撫でるのを止め、その手で花鉗があつた額に触れてみる。
やつぱり今はなんの変哲もない、ただの額だ。

「永翔様。ちょうど今、曹侯遠先生を長として、青龍国の史書を作るための準備が進
んでいますよね？ 永翔様が新設した史館に四龍各国から文献が集まっているところ
です。玄龍国王家に伝わる呪術に関する書物も、史館を探せば見つかるかもしけま
せん」

「確かにそうだな。曹侯遠に話を聞いてみるか」

「永翔様は冠礼^{かんれい}の儀の準備でお忙しいですから、私が代わりに調べます。侯遠先生に
もお会いしたいですし」

「……いや、それは危険だ。もしも皇太后が明凜の動きを知つたら、何をしてくるか
分からぬではないか」「だからこそ、皇太后陛下^{おとと}が大人しい今のうちに動くのです。それに、今は冠礼^{かんれい}の儀
のために四龍各国から人や物が大挙して青龍国に押し寄せていて。この混乱に乘じ
れば、私が変に目立つこともないかと」

「しかし……」

永翔様の心配性は今に始まつたことではないが、毎度ここまで心配されると、私も
骨が折れる。

私は隣にいる永翔様の腕に手を絡ませ、彼の肩にそつと寄りかかった。永翔様もそ
れに応えるように、私の頭に頬をすり寄せる。

毒見をするなどか、一人で動くのは危険だとか。

その言葉が私の身を案じているからこそそのものだということを、私もよく分かつて
いるつもりだ。

でも、永翔様はご自分一人でなんでも抱えすぎる。
信頼されていない、とは思わない。ただ、私は早く永翔様の心の重荷を下ろしてあ
げたい。

過去には、子どもの頃の私を毒矢で亡くし、母の楊淑妃を病で亡くした。その上、
皇太后からたびたび毒を盛られたことで、永翔様のお毒見役たちも次々に命を落とす
こととなつた。

それらの死をすべて、自分のせいだと思つてゐる永翔様の心の傷の深さは計り知れ
ない。

(永翔様に落ち度なんて、何一つないのに……)

彼の心の傷が本当の意味で癒えるまでの間は、私のことを心配してくれるなど言つ

ても無駄だろう。

その代わり、せめて馨佳殿を訪れた時くらいは心穏やかに過ごしてほしい。そのために私ができることがあれば少しでも手伝いたい。
……そう思つてゐるというのに。

「私が侯遠先生に頼んで、呪術について調べます」

「駄目だ」

私たちは、しばらく押し問答を続けた。

永翔様がようやく折れたのは、朝餉を食べ終わる頃のことだった。

「いいか、明凜。史館で何かあればすぐに商儀に助けを求めるんだ。それと、夕刻までには必ず馨佳殿に戻ること。最近、市井で病が流行つてゐるから、曹侯遠以外の者とはできるだけ距離を置いて……」

永翔様の話は終わらない。この調子では、夕餉の頃には「やはり危険だから史館に行くのはやめろ」と言い出しかねない。

侯遠先生に会いに後宮を抜け出すなら、今日しかない。

「はいはい、永翔様。全部分かっていますから！」

心配症の永翔様を笑顔にしたくて、私は両手の指でハートマークを作つてみせた。

前世でよくやつていた、ボディランゲージだ。

「明凜。なんだ？ その手は」

「これは、心形と言つて、愛情を表す形です」

「愛情……？」

「そうです！ 私と永翔様の間の、愛。可愛い形でしょ？」

ハートマークを作つた指を、永翔様の胸に押し当てる。照れくさそうにふつと笑つた永翔様を見て、私もなんだか幸せな気持ちになつた。

「さあ、永翔様。早く行かないと朝議に遅れますよ」

朝餉を終えた永翔様を、いつものように馨佳殿から送り出す。

後ろ髪を引かれるように、何度もこちらを振り返りながら出て行く永翔様を、殿舎の外に出て見送つた。

私の腕の中で微睡んでいた黒猫の珠珠は、外の空氣の冷たさに不機嫌な声でにやあと鳴いた。



四龍を統べるのは青龍国で、古来よりその他の三国は青龍国皇帝の臣下という立場だ。

つまり、永翔様は四龍の頂点に君臨する天子。

成人を祝う冠礼の儀が終われば名実ともに、大陸で最も尊い存在となる。

(そんな永翔様の寵愛を受けたいと考える人が大勢いるのは分かる。でも、さすがにこれは想像以上だわ……！)

侯遠先生に会うために、男装して後宮を抜け出した私の目の前には、驚きの光景が広がっていた。

青龍殿の門前にひつきりなしに到着する馬車の列は、最後尾が見えないほどに長く続いている。馬車からは美しく着飾った女性が次々に降りてきて、門の前に集まっていた。

青龍国だけではなく、赤龍国や白龍国の襦裙を身に付けている者もいるが、多くが私と同年代くらいの若い女性たちだ。化粧と匂い袋の香りが混じり合ったその場の空気に、私は思わず袖で口元を覆つた。しばらくすると彼女たちは宦官に誘導されて門の前に一列に並び、しゃなりしやなりと青龍殿に向かって歩いて行つた。

「商儀様。もしかしての方たちは、これから後宮に入つて皇帝陛下の妃嬪となるの

ですか？」

「まあ、そうなりますね。青龍国の皇帝たるもの、やはり世継ぎは必要ですから。ただ、陛下が一番大切になさっているのは曹妃です。そこはご安心を」

「玉蘭があの中にいたりして……」

「曹妃。自分で質問をしたくせに、私の話聞いてます？」

「え？ 玉蘭というのは……っと、失礼しました、なんでもありません！ 商儀様、

さあ早く行きましょう」

青龍殿に背を向けて、商儀様の背中をぐいぐいと押す。

わざわざ男装までして後宮を抜け出したというのに、ここで商儀様に変に勘織られては面倒なことになる。

(本音を言うと、内心では玉蘭のことが気になつて仕方がないんだけど……)

新しい妃が入内するのはいつぶりだろうか。永翔様が彼女たちに目を向けるとは思つていなければ、もしもあの中に玉蘭がいたとしたら話は別だ。

私は心の底から、永翔様と玉蘭の恋を応援できるだろうか？

幼い頃から大切に想つている永翔様の幸せを願い、笑顔で身を引けるだろうか？ チクチクとした胸の痛みを隠すように、私は両腕を組んで体に寄せた。

史書の編纂や保管のために新たに設けられた史館は、皇宮の南西の端にある。後宮から見ると、政の中心となる青龍殿を挟んでちょうど反対側にあたる。

後宮の妃嬪は本来、無断で後宮を出ることは許されていない。なるべく人目に付かないように遠回りして後宮を抜け出したので、ここまで来るのが想定よりも時間がかかってしまった。後宮を出た時点で午時を過ぎていたから、急がなければあつと言ふ間に日暮れを迎ってしまう。

周辺では多くの荷車が行き来し、真新しい史館の入口へ、荷が次々と吸い込まれていく。

（すごいわ！）侯遠先生が史館の長となつてから間もないのに、もうこんなにたくさん書物が皇都に集まつてくるなんて！

これだけの量の書物があれば、玄龍国の呪術に関するものも見つかるのではないかだろうか。思いがけない状況に、期待で胸が膨らんだ。

隣にいる商儀様もこの光景を初めて見たようだ。人と荷の多さに圧倒されて、「ほう」と感心したように辺りを見回している。

「曹侯遠殿には頭が上がりません。官職復帰は本意ではなかつたでしょに、皇帝陛下のためにここまでしていただけるとは……。これもすべて、曹妃のおかげですよ」

「そんな、私は何も。侯遠先生は隠居してからもずっと、永翔様のことを気にかけて

らつしやいましたから。永翔様のご人徳です」

「いえ。陛下が前を向くことができたのは、曹妃の存在があつたからこそです。あなたは仮初の妃ではなく、本当の意味での後宮妃になられました。ですから、私のことを商儀様と呼ぶのはおやめください」

「商儀様……ではなく、商儀と？」

今さら商儀と呼ぶのは気恥ずかしい。照れ隠しで肩をすくめながら微笑むと、調子には乗らないでくださいね、と釘を刺された。

「それにしても……あまり良い状況とは言えませんね。最近、原因不明の病が流行つていましてね。これだけ人の行き来が多いと、病が変に広まらないか心配です」

「そう言えば永翔様も、市井で病が流行つていると仰っていました」

先ほど青龍殿の側で目にした妃嬪たちも、史館の前で慌ただしく書物を運ぶ役夫たちも、青龍国だけではなく四龍の至るところから皇宮に集まつてきている。人の移動が多く、また長くなるほど、それだけ病が広がるのも早くなる。

「まだ皇宮内では病にかかつた者はいませんが、念のため曹妃もお気をつけて」

そう言って商儀は私の背中を押した。

侯遠先生はこの奥の房室にいると言う。私は慌ただしく荷を運ぶ役夫の間を縫つて、侯遠先生の元に向かった。

（えきふ）

「先生、お久しぶりです！」

山のようすに書物が積み上げられた長床几の向こうに侯遠先生の姿を見つけ、声をかける。振り返った先生は男装した私の姿に一瞬ぎょっとしたものの、すぐに返事をしてくれた。

「驚いた、まさか明凜が訪ねて来てくれるとは。元気にしていてるよ。それはそつと明凜、引いていませんか？」

「見ての通り、毎日書物に囲まれて忙しいが元気にしていてるよ。それはそつと明凜、ここまで一人で来たのか？」後宮を出る許可是？」

「私が先生を訪ねることは永翔様もご存じです。この房室の前までは商儀と共に来たのですが、私たちの話に邪魔が入らないように人払いをしていてます」

「そうか。では明凜、私を父と呼んでくれないのか？」

小声でそう言うと、侯遠先生は立ち上がりて両腕を広げる。

私もそれに応えて、先生の腕の中に飛び込んだ。

「お父様！」

「明凜……今は琥珀と呼んでもいいかな？ 元気そうで何よりだ」

髪を優しく撫でながら、お父様は私の本当の名を呼んだ。

「お父様が、いつか必ず私を曹琥珀に戻すと言つてくれています」

「そうか。その日が待ち遠しいよ。だが、焦りは禁物だ。皇帝陛下のお命を狙う者の正体が明らかになり、陛下の地位が安泰となるまでは、其方は明凜として生きなさい」

「分かっています。それまでは、お父様のことは侯遠先生とお呼びします」

お父様の肩の向こう、円窓の外では、役夫たちが相変わらず次々に荷を運んでいる。冬は日が短いから、暗くなる前に仕事を終わらせようと思いついているのだろう。この寒さだと今夜も雪になりそうだ。雪で荷が濡れてしまっては困る。

（私もあり遅くならないよう後に後宮に戻らなくちゃね。さてと、玄龍国の呪術に関する書物はあるかしら）

お父様の腕から離れ、私はあたりに積まれた書物の山を眺める。

「……それにしても、すごい量ですね」

「ああ、四龍の王家に呼びかけて集めてきたからな。この中から必要なものを精査し、記された内容が真実かどうかを確認した上で、史書として纏めていくことになる。私人では無理だから、人も雇わねばならん。気が遠くなるような仕事だよ」

「形になるまで、何年もかかるのではないですか？」

「すべて完成するまでにはそれくらいかかるだろう。だから、出来上がったものから

段階的に公表していく予定だ。私としては、できるだけ早く皇帝陛下にその地位を盤石にしていただきたいと思つてゐるからね」

そう言つてお父様は、長床几の前の椅子に腰かけた。

青龍国の史書が完成すれば、初代青龍国皇帝の血を引く永翔様が四龍の正統な統率者であることが明文化される。

既に青龍の力を発現させている永翔様が四龍を束ねる立場であることに対しても、今さら異論を唱える者はいないだろう。だが、それを文字として記しておくことに大きな意味がある。國を挙げて作った史館で正式な記録として残せば、簡単には覆せなくなるからだ。

史書が完成すれば、青龍国の官吏も民も皆、これまで以上に永翔様に忠誠を誓い、従うようになるだろう。

皇太后がいくら玄龍国出身者で周りを固めたとて、ここは青龍の地。青龍国の民心を得られなければ、皇太后が本当の意味で帝位に就くことはあり得ない。（大丈夫よ。皇太后の野心のために、永翔様と玉蘭の命を危険に晒すようなことはさせない。永翔様が名実ともに皇帝となるために、今のところはすべて順調に進んでいるわ）

私は改めて、書物の山を見渡した。

これだけの書物があれば、玄龍国だけでなく赤龍国や白龍国についても深く学べそうだ。

皇太后の陰謀を阻止するためには、知識はいくらあつてもいい。これからしばらく書物を読むのに忙しくなりそうだと予感しながら、私は側に積んであった書物の中から、目に着いたものを一冊手に取った。

（私一人では、どの書物を読んだらいいか選べないわね）

「お父様。私、四龍の王族の歴史を知りたいのですが……」

「玄龍国じゆじゆの呪術について知りたい、というのが本音だが、それを伝えればお父様も永翔様と同じように私のことを心配し始めるだろう。お父様まで深く巻き込むことのないよう、詳しい話は伏せておきたい。

「四龍の王族に関しての書物ならいくつかあるはずだが、一体なぜ？」

「どうか。一人で学ぶのは大変じゃないか？」

「大変かもしれません、頑張ります。何かが起こった時に、永翔様の一番近くにいるのは私です。できるだけのことは準備しておきたくて」

借りして帰つても？」

「……お前の頼みなら仕方がない。何か事情があるんだろう?」
「はい……」

「分かった。四龍の中でも国によって言葉が異なったり、古語で書かれていたりするから、まずは読みやすい簡単なものを持って帰るといい」

お父様は立ち上がり、書棚の中から何冊かの束を手に取った。

手渡されたのは昔話や、四龍の風土について書かれたものだった。

中を開くと、図も記してあって分かりやすそうだ。

「ありがとうございます、読み終わったらすぐにお返しに来ますね」

「ああ、また会いに来てくれ。そう言えば、後宮に妃嬪が増えると聞いたのだが……大丈夫か?」

お父様は気まずそうな表情で言つた。

幼い頃から永翔様のことを好きだった私が、ほかの妃嬪の入内で心を痛めていないかと心配してくれているのだろう。

「お父様、心配しなくても私は大丈夫です」

「それならいいんだが……冠礼の儀に合わせて、後宮妃も正式に封号を与えられることになる。もしもお前がゆくゆく皇后への冊立さくりつを目指すなら、四妃となつておいたほうがいい」

お父様は私の反応を探るようにこちらを見た。

四妃しきというのは貴妃、淑妃、徳妃、賢妃の四つの位のことだ。

青龍国こうりゅうの後宮において四妃は特に身分が高く、それ以外の妃嬪とは扱いが異なる。

四妃となるには生家の身分の高さが少なからず影響するし、妃嬪本人も高い封号をなまわ賜る分、それ相応の品格や見識を求められる。

ただし、皇帝の寵愛が深ければ、例外がないとは言い切れない。

青龍国においても、過去には皇帝に見初められた商人の娘が入内じゅないし、とんとん拍子に四妃まで駆け上った例があると聞いたことがある。

玲玉記では、鄭玉蘭は皇后として登場した。

青龍国じゅうりゆうの官吏の中に鄭という姓の者は思い当たらないから、もしかしたら玉蘭は、入内後に皇帝の寵愛によつて皇后の位まで上り詰めたのかもしれない。

なんと言つても二人は、灯華祭ランタンの天燈の明かりの下で、出会つた瞬間に一目惚れするほどの関係なのだから。

(いざれにしても、私に四妃の位は不要だわ。玉蘭さえ無事に皇后になつてくれれば、それでいい)

少し考えて、私は首を横に振つた。

それを見たお父様は寂しそうに苦笑する。

「本当にいいのか？ 其方以外の妃が皇后になるのを、側で見守ることになるかもしないが」

「お父様。私は高い位なんかよりも、永翔様の幸せを望んでいます。別の方が皇后となることが永翔様にとっての幸せなら、私はそれで構いません」

「……そうか。琥珀、もしも後宮が嫌になつたのなら曹家に戻つてきてもいいんだぞ。皇帝陛下には、私たちのほかにも多くの味方ができた。何もお前が後宮で危険を冒してまで陛下をお守りしなくとも、官吏の中には蔡雨月もいることだし……」

「私はまだまだ後宮で永翔様をお守りしたいと思っています。だから、しばらく曹家

に戻るのは難しそうです」

心配そうな顔のお父様を元気づけるように、明るく微笑んでみせた。

私の唯一の武器だった額の花鉢はもうない。

万が一、永翔様が食事に毒を盛られ、それを私が毒見で食べてしまつたとしたら、毒を浄化する力がない身では簡単に命を落とすだろ。

だからお父様の本心としては、私を後宮に置いておきたくはないのだ。

それでも私は、永翔様の側にいると決めている。永翔様と、これから現れる未来の皇后、鄭玉蘭を守るためにだ。

(それに今頃、その玉蘭が入内しているかもしれないし……ね？)

先ほど目にした大勢の新しい妃嬪たちは、永翔様への挨拶を終えて、そろそろ後宮に入った頃だろうか。

私は借りた書物を布で包んで小脇に抱え、史館に来た時と同じように幞頭を目深に被つた。滅多に会えないお父様との時間が終わるのは名残惜しいが、夕刻までには馨佳殿に戻ると、永翔様と約束している。

お父様に別れを告げて、私は房室の外で待つ商儀の元に戻つた。



(早く馨佳殿に帰らなきや。これは本格的に降り始めそう)

史館を後にしてしばらく歩くと、皇宮に小雪が舞い始めた。商儀は早く早くと私を急かし、後宮を目指して小走りで進む。

日が落ちれば、官吏たちは仕事を終えて一斉に帰路に着く。その人波に巻き込まれて誰かに見つかっては、面倒なことになる。「曹妃がのんびりしそうるからですよ！ 妃がこつそり後宮を抜け出したことが広まれば、ただではすみません。それに、皇帝陛下が馨佳殿を訪れた時に曹妃がまだ戻つていなかつたら、怒られるのは私なんですからね！」

「申し訳ありません！ でも私、もう息が切れて走れない……！ ちょうどここは青龍殿の目の前ですし、商儀は青龍殿に行つて、永翔様を上手く足止めしてくれませんか？」

「曹妃はどうするんです？ ここから一人で後宮に戻ると？」

「はい。後宮に入る抜け道も分かっていますし、着替えを隠した場所も覚えていていますから、一人でも大丈夫です」

「……仕方ないですね。そうしましよう。とにかく急いでくださいね！」

「分かっています！ では、永翔様の足止めをよろしくお願ひします！」

私の返事を最後まで聞かず、商儀はもう青龍殿に向かつて走り始めていた。

忙しい日に私の我儘に付き合わせてしまったことを、心の中で商儀に向けて謝った。
雪が降るほどの寒さだというのに、商儀に追いつこうと必死で走ったせいで体が熱い。変装のために身に着けた男物の袍の下には、じんわり汗をかいていた。お父様から借りた書物も思いのほか重たくて、後宮への抜け道に辿り着いた頃には疲れ切ってくたくたになっていた。

（あつたあつた、ここから後宮に戻れるわ）

鬱蒼とした木々をかき分けて進むと、その奥の壁に、後宮に通じる古い隠し扉がある。

ここを通れば、誰も使っていない無人の殿舎の裏手に出る。その殿舎の柱の陰に、私の襦裙を隠してきた。

ひつそりと着替えを済ませたら、何食わぬ顔で馨佳殿まで歩いて戻ろう。
今日のお忍びの外出については子琴とも示し合わせてあるから、「散歩をしてきた」と言えど、侍女たちをごまかすことができそうだ。

音を立てないようにそつと隠し扉を開き、息を潜めて後宮内に足を踏み入れる。茂みの間を抜けて視界が開けたところに、殿舎に上がる数段の階段が見えてきた。

周囲を軽く見回しても、誰もいない。

私はその階段を素早く駆け上がる。

着替えを隠した柱の裏で身をかがめながらもう一度あたりを窺うと、これまで誰も使つていなかつたはずの隣の殿舎に灯りがゆらゆらと動くのが見えた。

（あれだけ大勢の妃が入内したんだもの。空いていた宮が皆に割り振られたに違いないわ。もしかしたらここも……）

誰かに見つかる前に、急いで着替えを済ませなければ。

柱の陰にあつた襦裙に慌てて手を伸ばすと、その手と反対の小脇に抱えていた書物の束がずるっと滑り落ちた。

「あつ、雪で濡れちゃう……！」

書物をまとめていた布の包みの結び目が、階段を滑り落ちながらはらりと解けた。小雪が舞う中、包みの中身がバラバラになつて階段を滑り落ちていく。

咄嗟に手を伸ばした先、階段から数歩ほど離れた木の陰。

つい先ほどまでは誰もいなかつたはずのその場所に、黒い人影のようなものが動いた。

「……落としましたよ？」

木の向こう側の暗闇の中から、透き通つた高い声が響く。

（しまつた、誰かいるわ！）

青龍国の後宮には、当然のことながら、男性は入ることができない。

皇帝と宦官、太医くらいしか入ることを許されていないこの後宮で、この男装姿を見られたら、大騒ぎになつてしまふかもしれない。

私は急いで男物の幞頭を脱ぎ捨て、結い上げていた髪を下ろした。

階段を上がつてくる相手の視線から逃れるように、柱の陰に身を屈めて顔を伏せる。

「この書物、あなたのものではありませんか？」

「……」

「あら、どうなさつたの？ 大丈夫？」

高い声の女性はその場にしゃがみ込み、柱に隠れた私の顔を下から覗き込む。

間近で彼女と目が合つて、私は言葉を失つた。

遠くの明かりにぼんやりと照らされたその女性は、こぼれ落ちそうなほど大きな瞳で真つすぐに私を見ている。結い上げた黒髪には、蝶を象つた銀の簪。小さな珠で飾られた歩搖が、冬の寒風に揺れて透き通つた美しい音を立てた。

（絶世の、美女……）

突然目の前に現れた美女の姿に目を奪われてぼんやりしていると、彼女は不思議そうに首を傾げ、ぱちぱちと目を瞬かせた。

男物の袍を着て、長い髪をまとめもせずに風に揺らす私の姿は、さぞや滑稽に見えるだろう。

案の定、彼女は困惑した様子で恐る恐る口を開いた。

「あなた、宦官なの？」

「いえ、そういうわけではなく……申し訳ありません。すぐに出て行きますからご安心ください。拾つていただきありがとうございました」

美女の持つ書物を受け取ると、両手を差し出す。

「これは四龍の昔話を集めたものよね。とても懐かしいわ」

私は手渡す前に、彼女はその大きな瞳で手元の書物をまじまじと見つめた。

「……懐かしい？ それを読んだことがあるのですか？」

「ええ、私は玄龍国から来たから。玄龍国の昔話は、子どもの頃に父に何度も読んでもらつたわ」

美女はにっこりと微笑んで、それから私の両手の上に書物を載せる。

（ああ、なるほど。やはり今回は青龍国だけではなく、四龍の各国から妃嬪を迎えたのね。この方は皇太后と同じ、玄龍国出身の妃嬪なんだわ）

私が男装してこんな場所に一人でいることも、青龍国にまだ慣れていない彼女にとっては、さほど不思議なことではないのかかもしれない。

取り乱さず落ち着いた様子で微笑む彼女の姿に、私も安堵して胸を撫でおろした。騒ぎにはならず、無事に馨佳殿まで帰れそうだ。私は美女から受け取った書物をもう一度包み直し、隠してあつた襦裙と共に胸に抱えた。

しゃがんだ姿勢から立ち上がり、それに合わせて彼女もゆっくりと立ち上がって私にもう一度笑顔を見せる。

（やつぱり、お綺麗な方）

これほどまでの美女は、後宮の中でも見たことがない。妖艶な美しさと、天真爛漫で親しみやすい雰囲気を両方とも兼ね備えている。

それに、銀でできた簪はとても豪華で、裕福な家でなければ手に入らない高価なものに見える。

きっと彼女は玄龍国でも地位のある家の娘か、そうでなくとも、良い後見人が付いているのだろう。

「ねえ、あなたは誰に仕えているの？ 今日は大勢の妃嬪が入内したから、道に迷つてここに来てしまったの？」

「いえ、大丈夫です。私は馨佳殿のほうに戻ります」

「馨佳殿？ それはどこかしら。私も今日入内したばかりで、道案内ができず申し訳ないわね」

「とんでもありません！ 一人で戻れますので。夜半に大変お騒がせしました」

彼女の美しさに見惚れてつい長居をしてしまったが、いつまでもここで時間を潰していくには、永翔様の訪いに間に合わなくなる。

私は大きく頭を下げ、彼女の横をすり抜けて階段を駆け下りた。

（こんな格好だけど、着替える場所もないし仕方ないわ。このまま馨佳殿に戻ろう）

闇に包まれた後宮の中を男装姿で走り抜け、私が馨佳殿に到着すると、何やら中が騒がしい。侍女たちが私の不在を心配して、騒ぎ始めているようだ。

雪と泥で汚れた男物の袍を身に付け、髪を振り乱して息を切らせた私を、馨佳殿の侍女たちは悲鳴を上げながら迎えるのだった。

「子琴、陛下はまだかしら。せっかく準備してくれた夕餉が冷めてしまうわね」

今夜は永翔様の好物を色々と用意したのに、当の本人がいつまで経っても馨佳殿に現れない。

(きっと、私が商儀に永翔様の足止めを頼んだからだわ。頑張つて青龍殿に引き留めてくれているのかも)

私が後宮を抜け出したばかりに、侍女や商儀に手間をかけさせてしまつた。心苦しく思いながら、私は殿舎の外に出て夜空を見上げる。

先ほどまで散らつく程度だった雪は、段々と強さを増している。青龍殿から馨佳殿まで移動するだけでも大変なのに、この寒さと雪では尚更だ。

「永翔様が風邪を引いてしまわなか心配だわ」

「そうですね。ささ、明凛様も早く中へ。皇帝陛下がお越しになるのに合わせて、お食事を温めなおすように致します。それにしても今夜は遅いですね。皇帝陛下も冠

礼の儀の準備でお忙しいのでしょうか」

「そうね。忙しくてお疲れだからこそ、しっかりとお食事をしていただきたいのだけ

ど……」

白容^{はくよう}が入つてきて、私の前に跪いた。

「曹妃。皇帝陛下より、今夜は遅くなるため先にお休みになつてほしい、とのお言伝でござります」

「まあ……やはりお忙しいのね。白容、陛下がどれくらい遅くなるか聞いている? ちょうど読みたい書物もあるから、少しくらい遅くなつても待てるのだけど

「あの、どうやら今夜は……えっと……」

「どうしたの、白容。早く教えてちょうどいい」

「……申し訳ございません! 本日は新しい妃嬪^{ひひん}の入内^{じゅない}が多くあり、そちらの対応で手いっぱいだそうです!」

報告を終えた白容は、そのまま床に叩頭^{こうとう}して肩を震わせた。

(新しい妃嬪の対応で手いっぱい? 永翔様が?)

確かに、史館に向かう途中で青龍殿の門の前に多くの妃嬪たちが並ぶのを見た。永

翔様は、の方たち一人一人に対面しているのだろうか。

私が初めて後宮に来た日、青龍殿で再会した永翔様は、私に興味のかけらもない様

子だった。曹明凜という名前を聞いて、初めてこちらを振り向いたくらいだ。

やはり鄭玉蘭以外の女人には全く興味を持たない人なのだと、妙に納得したような記憶がある。

動搖していることを悟られないよう、私は白容に手を差し出して立ち上がらせた。

「白容。あなたが何をしたわけでもないんだから、そんな顔をしないでちょうどだい」

「でも、曹妃……」

「こんな季節に冷たい床に跪いたら、風邪を引くわ。今日はもう下がつていいから、ゆっくり休んで」

白容を房室から送り出し、誰もいなくなつたのを確認して、私は小上がりになつた

炕の上に腰を下ろした。

炕の下には竈の焚口から引いた煙道を通してあり、床暖房のようになつていて。今

の季節でも暖かいこの場所は、寒がりの永翔様のお気に入りだ。

沓を脱いで炕に上がり、壁に背を預けて両膝を抱える。

ここ青龍国では、人前で足を見せることはあまり行儀の良いこととはされていない。だからこんな格好をするのは、誰も見ていないだけ。いつも永翔様が座る定番の場所で、抱えた膝の上に自分の頭をだらりと預けた。

「あれだけ多くの妃嬪が入内したんだもの。いくら永翔様だって、無下に扱うわけにはいかないわよね」

後宮嫌いで知られる永翔様はこれまで、入内した妃嬪たちへの挨拶を顔合わせ程度で簡単に終わらせていた。

しかし、今回はこれまでとは違う。

永翔様が名実ともに青龍國皇帝として立つにあたり、四龍各國とは良好な関係を築いておきたい。皇太后率いる玄龍國出身の官吏たちの暴走に備えて、赤龍國や白龍国を上手く味方に取り込んだほうが得策に決まっている。

四龍のあちこちから集まつた妃嬪たちを尊重してこそ、国同士の結束は強まる。

(だから今夜は、私のところに来られないくらいに、ほかの妃嬪たちに時間を割いているんだわ)

永翔様が心から愛する相手は、未來の皇后となる鄭玉蘭ただ一人だけだと決まつている。

それでも、曹琥珀として四歳の頃に永翔様と出会い、今も後宮で永翔様と共に過ごす私には、ほかの妃嬪たちは違う特別な愛情を向けてもらえるのではないかと、心のどこかで期待していた。

玉蘭が癒すはずの永翔様の心の傷を、私なら代わりに癒すことができるんじやないか。

永翔様にとつて私は、玉蘭以上の寵妃になれるんじやないか。

烏滸がましくも、そんな風に考えたこともある。実際はこうして、玉蘭どころかほかの妃嬪たちにすら敵わないのに。

(私つたら……幼稚な嫉妬は見苦しいわ)

両膝を抱える腕にぎゅっと力が入る。

玲玉記の登場人物には、黄明凜という人も曹琥珀という人もいない。私一人だけが、この世界の部外者だ。

自分の立場をわきまえているつもりでも、時々こうして永翔様との距離を感じて切なくなる時がある。

(さつき出会った玄龍国からの妃、ものすごく綺麗な方だったな)

永翔様も、あの美女と対面してご挨拶しただろうか。

いくら後宮嫌いの永翔様だって、あれだけの美女に見つめられたら悪い気はしないだろう。

(むしろ、そのまま彼女の宮に足が向いて、今夜は共に過ごすなんてことも……)

嫌な想像ばかりが頭を巡る。

青龍国の皇帝という立場なら、むしろそれが普通だ。

後宮に住まう妃嬪は、誰もが永翔様のものなのだから。

「はあ……私らしくない。気持ちを切り替えよう。そうだわ、侯遠先生に借りた書物を読まなきゃ！」

あの皇太后のことだから、必ずや永翔様の冠礼の儀を邪魔してくるはずだ。皇太后

が大人しく引きこもっている今のうちに、彼女が使う玄龍国呪術の正体を突き止めておきたい。

書物を包んだ布の結び目を解き、一番薄くて早く読めそうな一冊を取り出す。

それは書物というよりも、黄ばんだ古い紙を無造作に紐で綴じた、冊子のようなものだつた。破らないように慎重に貞をめくると、そこには箇条書きで文字が書き連ねられている。

「あれ……？　例の玄龍国の美女は昔話だと言っていたけど、この書物はまた別物ね。なんだか、ただの目録って感じ」

織物、反物、装飾品、驢馬、羊……箇条書きで並べられたそれらの単語の羅列に、私は首を傾げた。

「これは、妃嬪が入内する時に持ち込んだ、持参品の一覧……ってところかしら？」

更に貞をめくつて見れば、それぞれの持参品の項目の最後には、日付とともに妃嬪の名前らしきものが記されている。書かれた日付が正しければ、二十年近く前の記録のようだった。

「……ということは、前の皇帝、つまり永翔様のお父様の妃嬪についての記録ということになるわね。皇太后の名前もあるかしら」

皇太后——玄龍国の公主、夏玲玉。

青龍国に嫁ぐはずだった姉の身代わりとして、前の皇帝の妃となつた悲劇の花嫁。しかし、一通り最後まで目を通してみても、夏玲玉の名は見つけることができなかつた。

その代わりに見つけたのは、夏雪媛の名。

雪媛というのは確か、玲玉の姉の名ではなかつただろうか。だとすると、元々青龍国に嫁ぐはずだつたのは、この夏雪媛のほうということになる。

(玲玉記に、玲玉が青龍国に嫁ぐ前の幼少期の出来事が書かれていたわよね。どんな内容だつたつけ……?)

前世の記憶の糸を、必死で手繰り寄せる。

しかし、私がこの世界に転生して既に十八年が経つている。十八年以上前に読んだ本の内容を事細かに思い出すのは、いくら玲玉記を愛読していた私にも至難の業だ。「なぜ雪媛の代わりに玲玉が青龍国に嫁いだのかしら……やつぱり思い出せないわ」永翔と玉蘭の恋愛の章ばかりを繰り返し読んでいたからか、一度しか読んでいない玲玉の幼少期の章の内容は、頭からすっぽり抜け落ちてしまつていて。

なんともつたないことをしたんだろう。玲玉記の世界に転生することが予め分かつていれば、もつと詳しく全編読み込むこともできたのに。

夏雪媛について書かれた頁を開いた状態で小卓の上に書物を置き、私は頭を抱えた。

「雪媛の持参品の目録が存在するということは、直前まで雪媛が青龍国に嫁ぐ予定だつたということよね。夏玲玉の入内は、姉の入内直前に急遽決まつたものだつたということかしら」

今の時点でのことを整理するが、真実にたどり着くにはまだまだ遠そうだ。(こんな時に、玲玉記の語り手だった陶美人がいてくれたら、雪媛のことを詳しく聞けたのにな……)

懐かしい人のことを思い出し、思わず私の口からため息が漏れた。

私の額に毒を浄化する花鉢を与えてくれたのは、前の皇帝の妃嬪であつた陶美人だ。正確に言うと、それは生前の陶美人ではなく、彼女が亡くなつて幽鬼の姿となつた後のことだつたのだが。

陶美人は、密かに想い合つていた後宮太医の許陽秀を皇太后に殺され、陽秀との間に生まれた実の娘とも生き別れになつたことで、成仏できずに幽鬼としてこの世にとどまつた。

そして陶美人は私の本当の名である琥珀を名乗り、玲玉記の物語の解説をする

語り手として色々と私に助言してくれていたのだが――

私と永翔様が彼女の心残りを解消したことにより、陶美人は幽鬼の姿から解き放たれて成仏した。もしかしたら今頃、別人としてこの世に生まれ変わっている頃かもしれない。

「陶美人。今こそあなたの力を借りたかったです」

静まり返った房室の中で一人、私は小卓に突っ伏した。

侯遠先生から借りた書物を片付けることができないほどの、急激な眼気が私を襲う。重たくて半分閉じた瞼の向こう側にうつすら見えたのは、珠珠の姿だ。

珠珠は私の隣に寄り添うように寝転ぶと、しつぽを振りながら小さく鳴いた。

「もう……あなたは呑気ね」

珠珠のしつぽを思い切り掴んでやろうと手を伸ばしたが、眼気には勝てない。珠珠に触れる前に力尽きて、腕を小卓の上に投げ出した。

いつもはここにいるはずの永翔様の顔を思い浮かべながら、私は両目を閉じた。



「にゃあ、にゃあっ！」

(ん？　なに？)

「珠珠、騒ぐな。明凜が起きてしまう」

「んにゃああっ！」

珠珠の騒がしい鳴き声のせいで、突然夢の世界から引き戻される。

おかしな体勢で小卓に突つ伏していたからか、肩と腰が痛い。

ゆっくり体を起こすと、炕の上に座る私の目の前には永翔様と、その腕に抱かれた珠珠がいた。

「あれ、永翔様？」

「明凜、夜半に起こしてすまない。牀榻に運ぼうと思つたんだが、珠珠がこうして騒ぐから」

永翔様が軽く「めつ」と睨むと、珠珠はツンと顔を逸らしてどこかに行つてしまつた。

「申し訳ありません、永翔様。うたた寝をしてしまつっていたようです。子琴に言って何か準備させますね」

急いで炕から下りて沓を履くと、ちょうど子琴が温めたばかりの羹を運んできたところだった。永翔様の訪いに気が付いて、温め直してくれたのだろう。卓の上に並べ終わると、子琴はニヤニヤしながら私に目配せし、そそくさと房室を

出て行く。

(もう、子琴つたら)

子琴の笑顔を見ていると、今にも「明凛様、愛されてますね!」という冷やかしが聞こえてきそうだ。椀を手にして羹を取り分けていると、永翔様は私が毒見をしてしまわないと窺がうように、手元をじっと見つめてくる。

いつもと変わらず私を心配してくれる永翔様の姿に、少し安心した。つい先ほどまでは新しい妃嬪の入内に嫉妬して落ち込んでいたというのに、私も現金なものだ。

「永翔様。ここで作る食事は、子琴が食材からしつかり管理してくれています。侍女が毒見をしてくれていますが、決して危険ではないのですよ」

「……そうか。私のために明凛や子琴にも手間をかけてすまない」

「永翔様はいつもそつやつて謝ってばかり! 皇帝陛下がお毒見係を付けるのは当然のことなのですから、罪悪感でご自分を苦しめないでください。それに、私が後宮に来てもうすぐ一年経ちますが、一度も皇太后陛下から毒を盛られたことはありませんし」

羹(あつらわ)をすくった匙(さじ)にふうと息を吹きかけて冷まし、永翔様の口元に運ぶ。すると、永翔様はそれを素直に口にした。

(幼い頃は、食事にたびたび毒が盛られたと聞いたけど……)

呪術(じゅじゅつ)を操ることができる皇太后のことだから、冠礼(かんれい)の儀を前に永翔様の毒殺を狙つても不思議ではない。

しかし実際はこの一年の間、永翔様は一度も毒を盛られたことはなかった。
一年前に入内して以降、皇太后が呪術を使つたのは、清翠殿(せいすいでん)での幽鬼出没事件のときだけ。

私は、それがどうしても腑に落ちない。

「皇太后陛下(こうたいしゃ)が永翔様に対しても手を緩めたのはなぜでしようか。清翠殿での一件を考へても、呪術(じゅじゅつ)が使えなくなつたわけではなさそうですし」

「明凛。私の食事に盛られた毒が誰の手によるものなのか、調べても証拠(ゆうきょく)は出てこなかつたんだ。皇太后の仕業(じぎょう)だったと決まつたわけではない。毒の件で、不用意に皇太后の名を出さぬほうがよい」

「そうですよね、失礼しました。気を付けます」

「ああ。今のところ信頼(しんりょう)できるのは曹侯遠(さうこうえん)と蔡雨月(さいうげつ)、それに商儀(しょうぎ)くらいのものだ。そのほかの者とは、呪術(じゅじゅつ)の話はしてはいけない」

永翔様は、「それと」と言って付け加える。

「毒を盛られることが明らかに減つたと感じたのは、前の皇帝陛下(こうたいしゃ)の駕崩(がほう)の頃から

だつたかもしれないな】

顎(あご)に手を当てて、永翔様は考え込んだ。

前の皇帝陛下の駕崩(がほう)というと、つまり永翔様が皇帝として即位したその時点から、明らかに状況が変わったということになる。

皇帝の代替わりが、皇太后の動きになんらかの影響を与えたのだろうか。

私たちは答えの見えない問いに、考えあぐねた。

「ううん、考へても仕方ありませんね。侯遠先生から書物を借りてきましたし、呪術(じゆじゅつ)について調べるうちに、何かが分かるかもしません」

「そうだな。今は焦つても仕方がない」

「先ほど少し書物に目を通したのですが、皇太后陛下が青龍国に輿(こゝり)入れした時の持参品の目録がありました。ただ、皇太后陛下のお名前はなく、代わりに夏雪媛(なつゆめん)という名が書かれています」

永翔様は夏雪媛の存在を知らないだろう。玲玉が姉の身代わりで青龍国に嫁(よつ)いだことは、前世で玲玉記を読んでいた私のみが知る事実だ。

「夏雪媛か。そんな名の妃嬪(ひび)がこの後宮(こうぐう)にいたのだろうか?」

「私にも分かりませんが、もしかしたら皇太后陛下の代わりに青龍国へ嫁(よつ)ぐ予定だったお姉様(ねえさま)だつたりして……! なんらかの事情があつて、急遽その方の身代わりに皇

太后陛下が嫁(よつ)いできた……とか?」

「妙(あつもつ)に話が具体的だな。身代わりか……まるで何かの物語のようだ」

羹(あつもの)を食べながら、永翔様は苦笑した。

(話の振り方がわざとらしすぎたかしら)

玲玉が雪媛の身代わりとして嫁(よつ)いできた説は、永翔様にはあまり響かなかつたようだ。

書物を読み進めていけば、雪媛についてのもう少し具体的な記述が、どこかで見つかるかもしれない。永翔様にはもう少しまとめてから報告することにしよう。

食事を終えて、子琴が卓上を片付けて下がつた頃には、もうすっかり深夜になつていた。

永翔様が身支度(じせど)を整えて牀(じゆう)に横になる。私も彼の隣、同じ掛布(かけふ)の中に潜り込んだ。あらかじめ湯婆子(ゆたんぼ)で温めておいたのに、永翔様は「寒いな」と言って私の背中に腕(うで)を回して抱き寄せた。永翔様の胸の温もりに包まれるこの時間が、私にとって至福のひとときだ。

「明凜。今夜は遅くなつてすまなかつた」

背中に回された永翔様の手が、私の後ろ髪に触れる。

「眠つてしまふ前に、少しだけ話がある」

囁くような声の中に、深刻な雰囲気を感じる。今夜ここに来るのが遅くなつた理由なら、白容に聞いて分かつてゐるのに。

何を言われるのだろうかと不安になつた私は、返事をする代わりに永翔様の胸に顔を埋めた。

永翔様は私と顔を見合させて話をしたいようだつたが、私はそれを拒んで首を小さく横に振る。胸の動きで、永翔様がため息をついたのが分かつた。

「……私の冠礼の儀に合わせて、後宮妃に封号を授けることになった。政の都合や父親の地位も関係するから、誰をどの位にするか、なかなか私の思い通りにはいかない」

「そうですか。今日史館を訪ねた時、大勢の女人が青龍殿に向かうのを見ました。いよいよ永翔様も名実ともに皇帝となられますが、皇太后陛下がいる限り、すんなり上手くは進まないでしようね」

「ああ。今はまだ自由は利かない。だが、これから必ず変えていく。身分の高低にかかるわらず、私はこれからも明凜に会いに馨佳殿に来るから」

「……はい。お待ちしています」

永翔様は言葉を選んで遠回しに言つてくれているが、その裏に隠された意図を私は感じ取つた。妃嬪の中でも高位となる四妃に、私を冊封することはできないのだろう。

「今夜、永翔様が馨佳殿に来てくれたのは、きっと私を心配してのことだ。多くの妃嬪が入内し、冠礼の儀に向けて次々に皆の封号が決まっていくことになる。そんな中で、私が四妃に選ばれなかつたことを永翔様以外の者の口から聞かされ、傷付くのではないかと気遣つてくれたのだろう。

これまで、永翔様は馨佳殿に足しげく通つてくれた。

だが、四龍を束ねる青龍国の皇帝という立場では、四妃を差し置いて一人の妃ばかりを寵愛するわけにはいかなくなるだろう。後宮の掟や、世継ぎ誕生への周囲からの期待が、これから永翔様を縛ることになる。

その現実を、理解しているつもりではいる。

それなのに、目の前にある永翔様の温もりが、今にも消えてしまふ儚い幻のように感じられて、堪らなくなる。